

格助詞 確認テスト（「の・が」の用法ほか） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

問1 ア（主格）。「雪の降りたる」＝「雪が降った」で、「の」は連体形「降りたる」の主語を示し、「が」に置きかえられる。「雪の降りたる」という連体修飾節全体が下の体言「朝」を修飾するが、「の」自体の働きは節の中の主語を示すことなので主格である。⑧「白雲のたなびく山」の「の」（問11）と同じ構造。連体格は、問9(1)「風の音」のように「の」が直接下の体言にかかる場合をいう。

問2 主格。「月の出づる」＝「月が出る」。連体形「出づる」の主語を示しており、「が」に置きかえられる。

問3 白い鳥で、くちばしと脚とが赤い（鳥）が、水の上で遊んでいる。（「鳥の…赤き」は同格。「白い鳥で、くちばしと脚が赤い、（その）鳥が」と、同じ鳥を指していることを示して訳す。）

問4 同格。「白き鳥の、嘴と脚と赤き（鳥）」のように、「の」の前の「白き鳥」と後の「嘴と脚と赤き」が同一の鳥を指す。「白い鳥で、くちばしと脚とが赤い（鳥）」と「～で」を補って訳せる点、また「の」の下に「白き鳥」と同じ体言を補える点から同格と判断できる。

問5 主格。「花の散る」＝「花が散る」。連体形「散る」の主語を示す。

問6 (1) 花が散るのを惜しんで。(2) 鐘の音を聞くやいなや、涙がとどまらず流れる。

問7 主格。「我が思ふ」＝「私が思う」。「思ふ」の主語を示す。

問8 主格。「君が植ゑし」＝「あなたが植えた」。連体形「植ゑし」の主語を示す。

問9 (1) 連体格（風の音＝風の〔音〕、下の体言「音」を修飾）。(2) 主格（秋の来ぬる＝秋が来た、「来ぬる」の主語）。

問10 目的格（連用修飾格）。「秋の来ぬるを知らるる」の「を」は、「知らるる」という動作の対象（～を）を示す格助詞。

問11 主格。「白雲のたなびく」＝「白雲がたなびく」。連体形「たなびく」の主語を示す。下の体言「山」を修飾する連体修飾節の中の主語である。

問12 オ（資格）。「さやうの人にてありけり」＝「そういう人として存在した・そういう人であった」。身分・資格・状態を示す。

問13 準体格。「貫之のなり」＝「貫之のものだ」。「の」が「貫之の〔歌〕」のように体言「歌（もの）」の代わりをしている。代わりをしている語は「歌（＝もの・作品）」。

問14 ア（手段）。「弓矢して」＝「弓矢で・弓矢を用いて」。道具・手段を示す「して」。

問15 ウ（共同〈～とともに〉）。「友として都へ上る」＝「友とともに都へ上る」。連れ立つ相手を示す。

問16 イ（使役の対象）。「童して文を持たせ」＝「召し使いの子供に文を持たせて」。使役「す（持た・せ）」の動作をさせる相手を示す。

問17 ア (起点 〈～から〉)。「京より下る」＝「都から下る」。出発点を示す。

問18 ⑭。「聞くより (＝聞くやいなや)」が即時の用法。⑬は起点、⑮は比較である。

問19 ウ (即時 〈～やいなや〉)。「鐘の声を聞くより」＝「鐘の音を聞くやいなや・聞くとすぐに」。動作に続いてすぐ次のことが起こる意。

問20 エ (比較 〈～よりも〉)。「花より白く」＝「花よりも白く」。比べる基準を示す。

問21 ア (場所)。「山里にて聞く」＝「山里で聞く」。動作の行われる場所を示す。

問22 白雲で (、峰にかかって山の端も見えない)。＝「白雲が、峰にかかって…」ではなく、「白雲で、(その白雲が) 峰にかかって」と、「～で」を補って同格の意を示す。